

## 武者小路実篤作、岸田劉生画『カチカチ山と花咲翁』の挿画にみられるウィリアム・ブレイクの観相学的人体造形の影響

松下哲也(國學院大學)

岸田劉生(1891-1929)は、武者小路実篤作の児童書『カチカチ山と花咲翁』(1917)の挿画を担当している。その挿画にはアルブレヒト・デューラーやウィリアム・ブレイクの影響が強く見られ、特に登場人物の描き分け、身振りや表情の描写がブレイクの観相学的な造形を想起させる点は注目に値する。にもかかわらず、これまで本作品は近代日本における西洋の観相学的な造形の流入を示す史料として扱われてこなかった。そこで本発表では、岸田とブレイクの作品と画論の比較および当時の日本の美術教育で用いられていた解剖学書の分析を通じて、本作品の人物描写の背後にある知識体系を考察する。

ブレイクは、独、仏、英語版が出版され、18-19世紀のヨーロッパ社会に広く普及したヨハン・カスパー・ラヴァターの『観相学論』(英語版 *Essays on Physiognomy*, 1789-98)に強い影響を受けている。『観相学論』は伝統的な観相学の体系に同時代の形態学、解剖学、美術様式史等の知見を織り交ぜた書物であり、ブレイクはこの観相学を絵画の登場人物の性格や感情の描写に応用した。そのブレイク独自の観相学体系は1809年の個展カタログの中で詳述されている。

岸田は、ブレイクの作品は「精神」の力を表象する装飾的絵画であると述べ、その「人間の顔は……深い精神を体してゐる」と論じた(『劉生畫集及芸術観』1920)。ゆえに、少なくとも岸田はブレイクの作品からその造形意図を感じ取ってはいたと言える。とはいえ前述のブレイクの個展カタログを詳しく紹介した日本語の論考は、寿岳文章が岸田の没年に発表した「ブレイクの畫論」(『美』23巻3号、1929)が最初である。さらに寿岳がここで観相学に関する記述をすべて読み落としているという状況から考えると、ブレイクの画論と観相学を結びつけられるだけの知識を岸田が持っていた可能性はきわめて低い。しかしながら、ブレイクが参考にしたラヴァター観相学の要素のうち、もっとも重要な項目が美術解剖学を通じて明治期の日本に伝来している。

森林太郎(鷗外)、久米桂一郎同選『藝用解剖學 骨論之部』(1903)には、18世紀オランダの解剖学者ペトルス・カンパーの顔面角理論が掲載されている。これは理想美としての古代彫刻と実在の諸人種、人間と猿、幼年から老年にいたる年齢の差異などが顔面の角度の差として数値化、視覚化可能であるという造形理論である。ラヴァターの『観相学論』はこの理論を大きく扱っており、ブレイクは個展カタログのなかで、これをキャラクターの描き分けの技術として用いたと述べている。さらに久米は東京美術学校の教授職のかたわら岸田が学んだ白馬会洋画研究所で指導にあたっていたため、岸田はカンパーの理論を十分に知り得る立場にいた。ゆえに、この顔面角理論にこそ岸田の『カチカチ山と花咲翁』における人物描写とブレイクの絵画の最大の共通点が見いだせると考えられるのである。